



●ファッションデザイン講座ご案内

クリエイターの多い2つの研究会がファッションにおける持続可能性をテーマに、実践講座を企画しました。どなたでも無料で参加できます。

◆表題：プロのクリエイターが見せる、語る！ファッションの現場

◆日時：2月25日（土）14～16時

◆講師：瀧波季絵子（シューケア商品プランナ） 渡辺真由子（ジュエリーデザイナー） 疋田千枝（洋服クリエイター）

◆内容：研究会員3名が「シューケア商品ビジネス」「アクセサリデザイン」「着物リメイク」の実践例や苦勞を30分ずつ紹介し、最後にファッション分野の持続可能性についても対談形式で語り合います。

◆会場：オンライン開催（Zoom利用）

◆費用：無料

◆申込受付中（2月22日（水）〆切）

<https://forms.gle/HGwBaUHpufHdPmYH8>

◆詳細：

https://color-science.jp/society/230225_event/

美しい日本の色彩環境を創る研究会
くらしの色彩研究会（祖父江由美子）

●私の好きな色 卵色（玉子色）

卵の黄身の色や、黄身と白身をかき混ぜたような色、または、ゆで卵の黄身の色などと諸説ある。江戸前期からの色名。

卵の黄身の色は、鶏の餌によって変わるそうで、トウモロコシなどを餌にすると黄色系に、マリーゴールド・パプリカなどを餌にするとオレンジ・赤系に、そして米や玄米を餌にすると白系の色になる。

江戸時代の卵の黄身はこのような薄い色をしていたのかもしれない。

英語のエッグは卵全体を指すが、黄身のことはヨーク (yolk) といい1905年にヨークイエローという黄色の色名が創られている。

【たまごに関するその他の色】

「鳥の子色」卵の殻の色。ごく薄い黄みの灰色。

「卵黄色」明るい橙。

「薄卵色」卵色の薄い色。淡い黄。

「濃卵」卵の黄身の鮮やかな色。鮮やかな黄。

「玉子鼠」鼠とつく色名だが、灰色の量はごく少ない。明るく淡い黄。

●卵色（たまごいろ）

[明るい赤みの黄]

10YR 8/7.5



参考文献：福田邦夫著『決定版 色の名前 507』

内田広由紀著『定本 和の色事典』（森加なつ美）

●大辞泉ひろいよみ 3ーあ

銅：あかがね。赤銅色（しゃくどういろ）。

赤木：皮を剥ぎ取ったままの木。材が赤い木。

赤朽葉：染め色の名。赤身の多い朽葉色。

赤熊：ヒグマの別名。

赤子・赤児：生まれて間もない赤ん坊。

赤茄子：トマトの別名。

茜：赤根の意。アカネ科の蔓性多年草。根からとった赤色の染料。成分はアリザリン。染めた色は沈んだ黄赤色。暗赤色。

赤不動：高野山明王院蔵の不動明王画像の通称。青不動、黄不動とともに三不動の一。

赤船：江戸後期、蝦夷の産物を江戸・大坂に運んだ、幕府直営の運送船。船体を赤く塗っていた。

赤本：江戸中期に流行した子供向けの絵本。表紙が赤いところから呼ばれる。青本、黒本。

赤紫：赤みを帯びた紫色。

明るい：色が澄んで華やかである。明るい青。

秋茜：日本で最もよく見られるトンボ。あかとんぼ。

灰汁：植物を焼いた灰を水に浸して得る上澄み液。アルカリ性を示し、古来、洗剤・漂白剤として、また染色などに用いる。

灰汁桶：染め物に使う灰汁を取る桶。桶の下の口から灰汁が落ちる仕掛け。（永田泰弘）